

いま協団を拓く
2004全国集会
inなかの

第9分科会

文化が育む人と地域

永田麻美((財)都市農山漁村交流活性化機構)

「芸能は変化していくもの。変化しながら、それが伝統になっていく」

まつり創造集団「結衆大地」の佐々木さんが、20年に及ぶ活動のなかで、感じられたことです。芸能、文化は人がつくるもの。であれば、その時代を担う人々の手により、むしろいい意味で変わっていったいいと、私も思います。「新たなものを取り入れることには、すごく抵抗があるんですね」(佐々木さん)。みんなそうです。

千曲市大わらじ委員会委員の田島さんは、赤裸々に、またユーモラスに、活動を紹介してくださいました。大わらじを編むという手技が、新宿のホームレスの人々に希望を与え、文化が「職」と「食」をつなぐ可能性を教えていただきました。田島さんも、おっしゃいました。「伝統とケンカすることは難しい」

けれども、文化は世代を越えて地域を結びます。言葉の通じない異なる世代であっても、一緒に感動して肩寄せ合うことができます。例えば踊りや音楽がそうです。

その昔、全日本フォークジャンボリーを実施・運営した仲間と始めたフィールドフォークという手づくり活動が、「さんさ酒屋のコンサート」となり、現代の多様な世代をつないでいます。小さな造り酒屋の蔵でのコンサートは、新酒を祝い、新酒に感謝、新酒に酔いしれながら、フォークソングが人と人との距離を縮めます。

フォークといえば、団塊の世代以上が懐かしむ音楽というメディアのステレオタイプな捉え方にはうんざりしていました。が、いまや懐かしの音楽リバイバルブーム。若い世代が、新鮮な曲として、フォークを聞く時代です。

「さんさ酒屋のコンサート」でも、地元フォークグループ「土着民」の音楽に触れて以来ファンになり、中学生の頃から足しげくコンサートに通い、ついには「さんさ酒屋のコンサート」に出演した男の子がいました(いまではもう立派な大人ですが)。

私の知り合いの、東京出身で愛媛で農業修行する20代の男性は、あるときこんなメールをくれました。

「いま、地元の獅子舞を練習しています。」



- コーディネーター 永田麻美（財団法人都市農山漁村交流活性化機構）
- 報告者 佐々木清（まつり創造集団「結衆大地」）
- 田島巖（上山田大わらじ委員会）
- 滝本慈宗（飯田市立中央図書館）
- 上村一（居住福祉推進機構）
- 山内總太郎（山内酒造）

獅子舞は、ブレイクダンスより、クラブダンスよりかっちょいい！！なぜなら、日頃のしんどい農作業が、獅子舞でかっこよく表現されるからです」

現代っ子の若者には、郷土芸能はかえって新鮮なようです。

先日、東京は銀座のど真ん中で催した「青空市場」では（青空市場実行委員会主催、事務局まちむら交流きこう）大田区の萩中小学校の子どもたちがよさこいソーランを元気いっぱい踊ってくれました。そのステージの間、大人は釘付け。次のステージを待ち望む声さえも。子どもたちの誇らしげな表情、手足の先までエネルギーに満ちた勢いの良い動き。ステージ周りに集まってきた大人たちは完全に魅了されていました。

文化は、人と人の接着剤になります。

地域活性化に、最終的に必要なものは「文化」だと、私は思っています。それは、人々の心を豊かさを測る指標でもあります。文化のある町や村は、生きたエネルギーを感じますし、住民の意識、「民度」が上がるのも文化の力だと思います。

そのことを、上村先生が、多くの他地域の事例を交えながら全体的な視点でわかりやすく解説、お話しいただきました。

さてさて、第9分科会の圧巻は、なんとってもお寺の住職兼飯田市立中央図書館

員である滝本さんの、目からウロコのパフォーマンス。思い込みと固定観念で物を見る大人たちが、滝本さんのトークと紙芝居や写真に笑い転げ、ときにうなりうなずきながら、頭の体操をさせていただきました。

「発想を転換せよ」とはよく言います。でも案外これが難しい。日常の中に、その練習材料はたくさんあったのです。この日の滝本さんのパフォーマンスには「アンコール！」の声も。うーん、次は是非もっと大きなステージで。

全体を通じて共通していたのは、「生活を愉しむ、彩る、遊び心の大切さ」。人の心を豊かにし、感性を高めてくれる「文化」の役割を再認識した分科会でした。

以下、事務局で当日の様子をまとめました。

佐々木清さん（まつり創造集団「結衆大地」）

飯田市の北、高森町から来ました。高森町は市田柿の産地でもあります。結衆大地の発足は1984年で今から20年前です。太鼓をたたきたい、自分たちの祭りをつくりたい、大地のどこかに根を張って生きていこうと言って発足しました。

私は青年団活動をしていました。下伊那

は、青年運動と合わせて公民館運動の盛んなところでした。青年団の文化活動の中で伊那市の田楽座と知り合いになって、個人的に太鼓等の教習に通っていました。打合せのときに、新たな民俗芸能をつくっていくにはどうしたらいいかとぼろっとこぼしたら、サークルをつくってやってみたら提案されて、「大地の会」をつくりました。

今は全国でも各地域で太鼓をやっているグループも増えてきていますが、当時は飯田・下伊那地方で2団体しかありませんでした。会の収入である会費も全くなく、太鼓のグループなのに太鼓がありませんでした。結成2年目に、町の資料館に太鼓があるよということで使わせてもらうことになりました。その太鼓は高森町の南小学校の父兄会が昭和18年に買ったものでした。町が皮を張り替えてくれたことのお礼に、小学校へ出かけて、覚えたての太鼓を2曲披露し、子どもたちに太鼓に触れてもらいました。

1987年に町政30周年という記念行事があって、そのために太鼓の曲をつくるぞという話が突如として舞い込んで来ました。私はその制定委員として携わりました。曲は、高森町の歴史や自然を表現した太鼓にはめずらしい叙情的なもので、約15分の大作でした。その表現をいかにするか、地域への思いを自身に問うことになりました。その曲が私たちの拠り所となって、会の結束も強まりました。練習の苦労やみんなで打ち上げたときの感動が今でも心に刻まれています。

1996年、結成から10年ということで記念イベント「結い」を公演しました。そのときに会の名称を「大地の会」から「結衆大地」に改めました。失われつつある結いの心(地域住民の助け合い)を取り戻し、次の世代へ

伝えたいという願いをこめています。10周年を機に私たちは、はっきりしたテーマを持ち、太鼓をたたくだけではなくて、次の世代へ芸能の心、代々伝えられてきた民衆の心を伝える団体に成長したのではないかと思います。

1992年頃から保育園との交流が始まりました。獅子舞に大喜びする園児の姿に心を熱くしました。保育園との交流は地元の民俗芸能保存会に引き継がれ、その成果の一つとして、高森町の獅子舞の子ども版が1996年に誕生しました。地元の芸能に参加していなかった大人が見に来たり、練習に協力したり、思わぬ成果も得られました。

昨年、高森町の中学校の総合学習の時に高森太鼓の曲をやることが決まり、36名の生徒が文化祭で発表しました。驚いたのは、昨年の太鼓を見て、今年70名の生徒が集まったことです。生徒には、太鼓だけではなく獅子舞などいろいろな芸能に触れてほしいと思っています。

2001年に全日本芸能協会に加盟しまして、「結いの心 次代へ」をテーマに地域づくりフォーラムを開催しました。第2回、第3回とやっていきたいと思っていますが、資金も必要なので何とかしなくてはという状態です。飯田・下伊那地域の民俗芸能団体と一緒に行政からの援助も含めて検討しながら進めていきたいと思っています。

私たちは、近い将来この地域で暮らすであろう次の世代の人たちがどう地域を意識していくのか、そのチャンスをどうつくるのかが大切だと考えています。そして保存継承といっても形だけでなく、その時代に合った人々の思いもふまえて、保存・継承していくことが新たな祭づくりにつながるとしています。生きる喜びを地域づくりの

柱として、地域芸能を取り入れながら、新たな民族芸能づくりを目指して、楽しみながら20年踏みしめてきた大地をこれからも耕し、発展していきたいと思えます。

田島巖さん（千曲市上山田大わらじ委員会）

上信越自動車道完成、北陸新幹線開通、長野五輪開催と、21世紀に向けて産業基盤が進んでいる中、これに遅れることなく我が町も発展するのだろうか、期待と不安が日頃から入り混じっていたとき、現在の大わらじ委員会宮本委員長を代表とする大わらじ製作者9名の呼びかけに賛同した町内の仲間によって、1997年に「大わらじ委員会」がスタートしました。上山田町の智識寺には桂の木の本彫りでつくられている十一面観音があります。十一面観音は今は重要文化財ですが、戦前は国宝でした。高さが11尺もあります。智識寺は、三門にわらじをかけて、丈夫な足になりますようにと願かけする寺だったのですが、それがだんだん忘れられてきています。檀家のいないお寺なので、地域の人々の寄付で維持されてきました。この名物を使わない手はないということで、ここに大わらじを奉納することになりました。当時、私は上山田町の議会にいましたので、人集めや祭りの運営に関わって、それからずっとやってきました。

わらじを載せる荷車は、牛が引く荷車2つを真ん中で合わせてひもで結んだ手作りのものでした。村一番のお年寄りと、一番歳の若い赤ちゃんにそれぞれ乗ってもらって、十一面観音まで引っ張りあげます。

しかし、大わらじ奉納祭に対して、地元には余計なことをやるなという雰囲気もあって、討論をきちんとしてこなかった部分も

あり、7年目で中断してしまいました。それでもわらじを作りたいと腕が鳴るので、今回この集會に参加しました。せっかくのものを見ていただきたくて、全体集會の舞台に飾りました。みんなで知恵を出せば奉納祭を再開できると思いますが、今は力不足で中断しています。周りからはそろそろ何かやれと声がかかっています。

わら細工についてですが、上山田地域の温泉にお客が来なくなってきて、民芸品を作ったりして何とかしなくては、というときに、3日間で6000人の客を迎える集客活動があって、そのお客さまに民芸品作りをやってくれないかと依頼されました。温泉旅館の衰退とわら細工の企画がぴたっと一致したんです。まかすとけ、ということで観光会館でわら細工を楽しんでもらいました。

わらじ作りは大勢の協同の力でやらなくてはできないことです。私どものやっていることは遊びのように見えるかもしれないけれども、このような集會に参加して、協同組合やほかの方々の取り組みを聞いて、いろいろな人が集まってやるということが我々も似ているのではないかと考えています。世の中では行政上、いろいろなことが押し付けられますが、やはりそれに抵抗したり、提案したりしていかないとうまくいか



ないと思います。議会の立場にいて、けしかけ役をさんざんやってきましたので、これからも何かできればと思います。地域や組織の活性化の盛り上げのために大わらじを利用してほしいです。

滝本慈宗さん（飯田市立中央図書館）

図書館に勤めて23年になります。その間、多くの本を扱ってきました。絵本の面白さを知ってから、子どもやお母さんにお話をする事が多かったのですが、ここ4、5年はお年寄りにお話しすることが多くなりました。「いきいきリハビリ事業」といって、痴呆傾向が始まったり、身体の機能障害により閉じこもりがちなお年寄りを地域に引っ張りだそうという飯田市の試みに誘われて随分経ちます。1グループの受講者は20人前後。保健士さんと看護師さんがセットになっていて、健康チェックや健康相談をしながらレクリエーションを楽しみます。刺激を与えるために、「だます」ことをテーマに始めた講座は、やがて「ものの見方や考え方を変える」というテーマに発展していきます。

講座の様子

「自分の見方や考え方をちょっと変えてみると、案外違う人生を歩めるかもしれません。私たち日本人はよく優柔不断と言われます。しかし、見方を変えれば、いろいろなものを受け入れることができ、人のことを思いやることができる民族だというように考えることができます。」

「世界の大陸を並べ替えると日本になる！？ユーラシア大陸は本州、北米大陸は北海道、オーストラリア大陸は四国、アフリカ大陸は九州。よく見ると形が似ています。



地図で見ると日本は本当に小さいけれど、世界と同じ形をしているのです。ということは、世界の大陸の上に立っているのと同じこと。ちっぽけな存在なんかではないのです。」

「まちの中の面白いものを探す『路上観察』はこんなことを教えてくれます。まちの美しい風景、歴史的な遺物を見るだけでなく、自分の感性で見つけたものを集めるようになってから、まちの隅々まで目が届くようになりました。まちも人と同じように生まれたり、消えたりして変化することがわかったのです。飯田市は取り立ててこれというものがなくて、つまらないまちだったのに、愛着がわいてきました。自分のまちをまず好きになろうということです。」

「絵本を扱うようになって、大人と子どもの絵本の見方が違うことに気がきました。子どもは観察する目で、大人は鑑賞する目で絵本を読んでいます。絵本は文章以上に絵の中で物語を語らせるものが多いのですが、大人はそれに気がつかないのです。大人はストーリーに沿った絵の見方しかできません。見ようとしなければ物事は見えないのです。観察する目で物事を見ようというお話です。」

山内總太郎さん（山内酒造）

私の町は岐阜県恵那郡坂下町です。長野県の隣、木曾谷の入口にあって、今度中津川市と合併することになっています。中津川市に行くには、今、越県合併で話題になっている長野県の山口村を通っていかなければいけないところです。

酒屋と言うと立派な商家造りを連想されると思いますが、私どもは百姓あがりです。左側は住居、右側は厩がある昔ながらの造りです。裏に小さな酒蔵が建っています。農業のほう為主で、夏7月から10月までミネラルトマト栽培をしています。そして冬1月から3月に家内工業で酒を造っています。

私たちは、1969年から1971年まで3年間にわたり桜の湖畔で「全日本フォークジャンボリー」を開催しました。これは日本で最初の大掛かりな野外コンサートだと思っています。2年、3年と回数を重ねていくうちに、2日間、3日間と規模を拡大していきました。人口6000人の町に3万人近い人が集まるイベントになりましたが、私たちの手に負えるものではなくなってしまいました。

そこで自分たちが楽しめるもっと地道な活動をやるとうことで始めたのが「フィールドフォーク」です。自分たちの思いや生活を歌にしよう、歌だけでなくいろいろなものづくりを通して生活を豊かにしようという活動です。その活動の拠点になったのが、地元にある農村歌舞伎の芝居小屋「新盛座」です。岐阜県の東部は全国でも地歌舞伎の保存団体が最も多い地域のひとつです。岐阜県下に27団体ありますが、そのほとんどが東部に集中しています。フィールドフォークを中心となってやってきたのは、「我夢土下座」と「土着民」というグループです。活動は「新盛座」でのコンサートが

メインですが、コンサートの翌日は工場へ行って手彫りのお盆を作らせてもらったり、またそこで小さなコンサートをする。あるいは、陶芸をさせてもらいながらコンサートをするというような活動をしています。

何度か廃業を考えた酒屋も、フィールドフォーク精神で酒造好適米100%の純米酒の本物を造ることで生き残りをかけてみました。仕込みのときに、仲間のフォークソングのCDを聞かせています。ラベルも仲間が描いた絵や版画を使っています。遊び半分のような酒屋ですけれども、何とかやってきています。酒蔵コンサートですが、酒蔵の外でやっていまして、雪が降って非常に寒いというとてもない環境でやっていきます。仕事場でのコンサートを復活するという意味も込めて、歌だけでなくいろいろな活動をしている仲間たちとの交流を深めて、それぞれちょっとずつずれているのもいいではないか、ちょっと寄りうやということをやっています。狭いところですので、世話人から招待状が来た人しか観ることができない贅沢なコンサートです。

私たちの地区で歌舞伎が続いてきたというのは、恵那の人間の気質が要因となっているのではないかと思います。私たちにはそれぞれの立場を認めあいながら仲良くやっていくという人間関係があります。それに、私たちの地域は木曾川の支流のおかげで水争いの歴史がなく、ちょっと待っていれば水が流れてくるので、人間関係が丸いとも言えるかと思います。

ほかにも、仲間と始めた都市との交流体験農場「桜の湖農業小学校」、トウガラシ愛好者の「好辛倶楽部」、身近な自然と生活の知恵を学びあう「自然の宝箱探検隊」など地域に根ざした活動と仲間の輪は広がって



ます。いろいろな人の輪がだんだん広がっていきといいなと思いつつ、毎日遊び半分です。

上村一さん（居住福祉推進機構）

私が生まれた鳥取のまちでは、農協が全く成り立たなくなっていて、どうしようかというときに、これからは文化が大切だという話になり、そこから地域づくりが始まりました。世の中が発展すると、都市というものができて、若者は都市に憧れ、年に何度かの地元の祭よりも都市のほうがいいということになります。そこに新しいまちづくりが必要となってきます。こんな農村だったら若者も生き生きと暮らせるということをイメージして始めたのが、文化活動を中心としたまちおこしです。青年が村から出て行ってしまったら、この村はつぶれてしまう。だから青年が残ってくれるような文化活動をしたいというものです。

人が寄るところに文化が生まれるのですから、まず、人の集まるような文化ホールを建てました。ホールを建てるにあたって、3人の青年をNHKで勉強させようということで、農協に手配してもらいました。その3人がものすごく勉強して、NHKでつくった人のつながりを持ち帰って、ホールでコ

ンサートをやると言い出しました。そして1枚3000円もするチケットをすべて売り切りました。文化活動に自信を持った青年が村に戻ってきて、そこに新たに文化が生まれる。文化を媒体にして、その地域ならではのブランドが生まれることが個性豊かな要素なのではないかと思えます。

まちと言うと産業に注目しますが、ものだけではなく人間の能力という資源があるはずで、人間の能力の創造集団が地域のブランドになれば、それがまちづくりの拠点になります。産業も人間の能力も観光資源もすべて統合して見ることが21世紀の新しい形をつくりだすことにつながります。私は25年間、社会教育に携わってきましたが、まちづくりは国や行政がやるのではなく、自分たちがやっていくものだと思います。市民全体で社会教育を発展させていかなければいけません。

それでは市民の要求をどのようにして取り上げていくのでしょうか。教育ということをお話として一面的にとらえず、互いに学ぶということが大切です。居住福祉学会は、居住する社会を安心して安全で快適な地域社会はどのように実現できるか、その夢のために現実の中から学ぶということに第一にやっています。現場で学んだことは自身へつながります。文化とは生産することですから、自分たちが何かをつくりだすことができる場として農村や漁村とのつながりが生まれれば、そこに居住福祉社会への道ができると考えています。都市と農村の文化の交流、人の交流、情報の交流をやっていくことが文化を育む地域をつくることにつながります。

千葉県船橋市に約40年前に建てられた高根台公団住宅団地があります。今、建て替え

という時期を迎えて、その際に団地を再生するにはどうすればいいかという課題を抱えています。住みたいまちはこういうものなんだ、ということに住民が言わなくてはいけません。その自治会はきちんとしていて、船橋市という行政と事業主である公団との3者の協議会を設けて論議を始めています。

また、長崎県佐世保市では、市が土地を買って、福祉住宅団地を建設する計画を立てています。福祉タクシーやグループホーム、デイサービスなどの福祉機能がある住宅です。困ったときに安心できるというモデル団地として提案されています。

私は文化と地域づくりをずっと考えてきました。豊かな地域がなければ文化は育ちません。そして文化を通しての人の交流が基盤になっていなければいけない。いろいろな良い取り組みがもっと社会化していけば、それが地域から発信され、都市との交流が深まり、農村の活性化につながっていくと思います。

参加者の感想

- ・実演などが豊富で、とても飽きさせない内容でした。元々、昔ながらの伝統行事や地域の行事に興味があったので、とても自身のためになったと思います。見ていく中で気付かされることもあり、今後の活動に生かしていくことができれば良いと思います。
- ・街作りに果たす文化の役割が良くわかった。どこもが（例えば、湯布院や鎌倉、小布施のように）観光客が殺到する風景が本当の街づくりかと疑問をもつ。

- ・どの報告者も地域に目を向けた活動をしていて感銘を受ける。自分のところに帰って見直してみようと思う。文化のもつ力は生きる元気をつくる。
- ・郷土の文化に直に触れさせていただき、よい経験になりました。太鼓演奏など、胸心に響く物はすべての感性に響き、生きる力がわくものですね。